

妻有物語—銀塩物語

佐藤時啓

新潟県十日町地方の古い呼び名である妻有(つまり)。四方を山に囲まれた地形、とどの詰まりから来ているという。詰ではなく妻有との当て字はなかなかロマンチックな想像力をかき立ててくれる。ロンロン・インリのユニットにおける妻有物語は、まさにこの想像力を元にしたものである。実際の、しかしフィクションとしての男女二人の出会いと家族の形成、雪景色のなかでの古い日本家屋、美しい棚田、温泉などを舞台に家族の物語が展開されていく。

木々や畑や田んぼも、ひとたび雪が降り積もれば、全てが白一色。雪の擦れる音と風の音しか無い白銀の世界は、しかし光に満ちている。そして雪深い閉じ込められた空間には家族の愛が満ちる。手足がかじかむ寒冷で緊張感のある空気の中、温もりの家を目指す帰り道。雪国の記憶が一枚一枚めくられていく。現実感よりも遠い記憶の中に想像する世界。そのように感じるの、状況設定や内容ばかりではなく、綿毛が舞うようにふわふわとした質感を奏でるプリントにもよる。

この春に北京の三影堂にあるスタジオで暗室のプリント設備を拝見した。巨大な横投影型引き伸ばし機が鎮座するコンクリートの部屋。かつて商業ラボで使われていた古いがしっかりとした作りの投影機である。現在はそういった機械もだんだん必要とされなくなりつつある。しかし、アートの世界では銀塩写真の価値は現在絶頂にあると言って良い。その伸ばし機を使って巨大な銀塩プリントを焼くことができる。水回りも使いやすくできている。その部屋で映里さんが語っていたことが印象的だった。古い銀が浮き出したような経年変化した銀塩プリントのお話して、あえてそのようなプリントを制作したいということだった。変色して銀が浮き出した写真、そういえば記憶にある家の鴨居や床の間にも飾ってあった記念写真も黄変しテカテカと銀が光っていた。いつ頃の写真だったろうか先祖の集合写真だ。博物館や資料館にもその手の写真は事欠かない。ヨーロッパの路上のマーケットでも時折そういった古写真が売られている。また自身の作品の中にもまれに見る機会がある風化したプリント。そこには、時間経過の想像力が働く。

その写真には、閉じ込められた時間、その時にしかあり得ない出来事が標本のように封印されている。写真の中の個々の関係として、見る者の時間とは切断された関係性がある。しかし見るものは想像力をかき立てながら、その写された写真を眺める。想像力の中に生き生きと空間が甦る。それはすでに、平面の世界を超えて時間と空間からも自由になる。

すでに21世紀を迎えて14年も経過してしまっただが、20世紀そのものが銀塩写真の時代だった。19世紀の写真術発明としての銀板写真、同時期のカロタイプ写真、そして湿版写真を経て、銀塩写真の絶頂へ。ネガもガラス乾板があり、フィルムに変化した。本格的な映像時代であった巨大な20世紀のアーカイブはほぼ銀塩写真、銀塩フィルムと言って良いのではなからうか。今写真技術はまたデジタル化の波を経て産業的には完全にデジタルが主流になった。中国では、革命以前から続く写真館には銀塩写真の技術は伝承されているものの、一般的な経済開放以降に隆盛した写真表現は、最初からデジタル技術で始まっている。その中であえ

て銀塩写真を取り入れて始めたロンロンインリの作品の意味は深い。

銀塩写真は光がレンズを経て画像を結び、銀に反応してフィルムの明暗ができあがる、そして再び光を通じて印画紙の銀に反応させ現像処理していく技術である。仕組みとして非常に解りやすく、また技術として完成されている。そして物質的である。しかしながら、産業のシステムとしては衰退しつつある。ゆえに銀塩はすでにノスタルジックなのだ。最新の紙にインクを載せていく技術と、紙の中からじわっと黒が浮き出てくると、たとえ見た目が同じであろうとも感触は全く違うはずだ。この皮膚感覚に近いことを大切にしたプリント群である。

この作品妻有物語も、静謐な雪景が特に印象的だが、里山はやがて冬が過ぎ春になり、豊かな雪解け水は、実りを産み多くの植生を育む。夏になり秋が来て、と連綿と繰り返される自然のサイクルを、人生としてまたそれが模倣される。男女が出会い、子どもが誕生し家族が構成されていく。愛と誕生と生と死と再生のイメージ。銀塩という20世紀技術を大胆に使いながら家族の愛と生命の循環、そして有為転変の世界を表現する。

現代に生きる我々が未来を指向する方法は二つある。一つは常に最新のもの使い、最新のことを考える事。もう一つは、逆に過去に目を向け甦っていくことである。温故知新ということばもクラシックだが、また未来を指向する一つの方法なのである。妻有物語と言う言葉はそのように銀塩物語によって裏打ちされている。

(写真家/美術家 東京芸術大学教授)